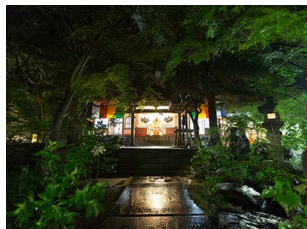


覚園寺(かくおんじ)にようこそおいでくださいました

覚園寺では、参拝いただく皆さまに毎日、境内をご案内しています。今のお寺をあずかる私たちが参拝者と対話・会話することでより一層お寺の魅力を感じ、理解いただけると思っています。

覚園寺では、参拝者に目には見えないけれどもたしかにある「信仰の空間」を是非自身で感じていただきたいという思いから、拝観ゲートから先、参拝者に撮影をご遠慮いただいております。

1. 愛染堂(あいぜんどう)



元は覚園寺の近くにあった大楽寺(だいらくじ)のお堂です。

時代の流れで大楽寺は存続できなくなり、覚園寺に移築されました。赤く腕が6本ある仏様は愛染明王です。

仏教ではギリシャ神話と同様にいろんな利益や役割をもった仏様がさまざまな姿でまつられます。愛染明王は、「幸せになるためにおそれや不安を打ち消し、ひたすら前にすすむ力」「情熱」をつかさどる仏様です。

2. 本堂 薬師堂(やくしどう)



覚園寺の中心となるお堂です。覚園寺は1218年に開かれましたが当時のお堂は焼失し、現在のお堂は、1354年に再建された建物が元になり、以来なんども修繕が重ねられてきています。中央にまつられている仏様が薬師如来、心身ともに元気でありつづける、もし怪我や病気になったらそれとともに前にすすむ力をあたえる仏様です。

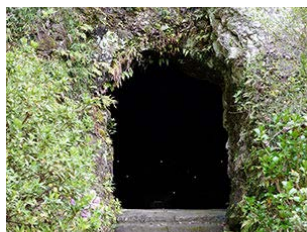
元気であり続ける力は、昼夜を問わず一日中必要であることから薬師如来の両側、右に日光菩薩の日の光、左に月光菩薩の月の光がまつられています。さらにその外には、中央の薬師三尊を守護し、参拝者を勇気づける十二神将像がまつられています。十二神将は私たちの干支の象徴でもあります。神将のあたまの上に干支の動物がつけられています。

3. 内海家(うつみけ)



1706年に鎌倉でつくられた裕福な農家です(当時畳が使われた農家は少なかったようです。)1981年に一度解体され覚園寺境内に移築されました。毎日この明るさのなかでよく暮らしていたなと感心するぐらい家のなかは暗いです。その分屋外の景色はより明るく感じられ、日本人は、お日様のありがたさや自然の景色のすばらしさを毎日感じていたと思います。

4. やぐら



鎌倉は山が多く平地が少ないことから、鎌倉の武士や有力者のお墓は、人を雇い山の斜面に穴を掘らせそこで火葬して埋葬されるようになります。ご案内しているやぐらは、儀式や修業のためのものですが、山の上には177穴が確認されています。

5. 地藏堂(じぞうどう)



仏様のなかで大地のちからを有する仏さまが地藏菩薩です。大地の象徴から田畑に恵みを与えると信仰され愛された仏様です。大地は、「いのち」をはぐくむ力とも解釈され、子どもを育て護る仏様とも信仰され、魔よけ(神社の鳥居や昔の橋が朱色なのと同じ理由で)の朱色の帽子と前掛けをつけるようになりました。

またお地藏さまは、杖をもち旅する仏様とも信仰され、古来街道沿いにまつられ旅人をまもる仏様でもあります。